様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２０３４８

研究課題名（和文）戦後のベルリンと東京における劇場展開－政治的・社会的言説空間のなかの演劇と娯楽

研究課題名（英文）Developments in the World of Theatre and Entertainment in After War Berlin and Tokyo from a Political and Social Point of View

研究代表者
井戸田　総一郎（Itoda, Soichiro）

明治大学・文学部・教授

研究者番号：４００９５５７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：ベルリンのLandesarchivなどの文書館において、特に1945年から1962年までの期間について、劇場・ヴァリエテ・映画館などの文化・娯楽施設に関する政策上の資料、さらに各施設の興行関連資料を収集し、施設の立地地図の作製も含めて総合的に分析した。戦後東京の文化・娯楽政策について、ベルリンとの比較を可能にするために1945年から1962年の期間について資料を収集し、特に国立劇場開設に関する資料を総合的に分析した。ベルリンと東京を繋ぐ演劇人としてブレヒトを取り上げ、亡命からベルリンに戻ったブレヒトの活動、およびその東京における受容の様相を雑誌『テアトロ』などを中心に分析・執筆した。

研究成果の概要（英文）：This research is based on the analysis of data such as city ordinances concerning theatre, Music hall, cinema and other establishments for entertainment from 1945 to 1962, which are stored in archives such as the Berlin Landesarchiv and the Berlin Stadtarchiv. Included are maps showing locations in West and East Berlin. For a comparison with after war entertainment establishments in Tokyo, especially ordinances concerning the National Theatre (Kokuritsu gekijo), data found in similar institutions for the same period of time were analyzed.Connecting the theaters of Berlin and Tokyo is playwright Bertolt Brecht, whose plays were frequently staged in both cities after he came back to Germany from his exile in the United States during WW II. After the war Brechts theses about theater were widely translated into Japanese and often published in magazines like "Theatreux". Brechts writings strongly influenced theatrical performances in Japan from that time on.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ベルリン　東京　劇場　ヴァリエテ　映画館　文化政策　娯楽政策　ブレヒト

１．研究開始当初の背景

ベルリンの劇場史については、Ruth Freydank 著"Theater in Berlin - Von den Anfängen bis 1945" (Berlin 1988, Henschelverlag)及びヴァリエテのジャンルを集中的に扱っている Wolfgang Jansen 著"Das Varieté - Die glanzvolle Geschichte einer unterhaltenden Kunst"(Berlin 1990, Edition Hentrich)などの優れた研究書が刊行されている。また Deutsches Theater や Theater des Westens などの個別の劇場に関する研究書や、Max Reinhardt などの演出家に関する多くの論文・著作が刊行されている。しかし劇場そのものを研究の中心に据えた場合、このような一連の研究によって、ベルリンの劇場展開が十分に記述されているわけではない。また、東京の劇場史についても個別の劇場における上演などについての研究は存在するが、欧米の都市と劇場の関わりという視点から、東京について記述を試みることはこれまでなされていない。ベルリンと東京の両都市において、特に戦後の展開について、国際的な視野を持った研究は存在していない。

２．研究の目的

ミュンヘンの iudicium Verlag から 2008 年 3 月刊行された拙著" Berlin & Tokyo－Theater und Hauptstadt"は、ドイツ及びアメリカの書評において、19 世紀後半から 1930 年代までのベルリンの劇場風景の変遷に関する体系的記述に初めて成功したと賞讃された。本研究は、このような実績に基づいて、Landesarchiv Berlin に所蔵されている戦後のベルリンの都市政策に関連する資料や、個別の劇場の運営・経営に関する資料を詳細に分析し、東西分裂時代と統一後の劇場展開を、その背景にある都市・文化政策との関連のなかで明らかにする。劇場史の国際共同研究を将来実現するために、東京の戦後の劇場展開も分析する。両都市について、芸術性を目指す劇場ばかりでなく、大衆娯楽の劇場も視野にいれる。劇場立地地図も作成し、その鳥瞰図的視野とオリジナル資料の細部に及ぶ分析を立体的に組み合わせる。ベルリンと東京の劇場展開の分析・記述を通して、他の都市にも適応することのできる劇場史方法論の構築の可能性を追究する。

３．研究の方法

劇場で上演される作品の内容や演出形態ばかりでなく、次のような問題域、つまり都市化（人口変化、交通網等）、制度（営業法、火災衛生条例、検閲令等）、組織・経営（GmbH 等の会社形態）、機能（芸術性、娯楽性、レパートリー、観客席構造）の問題域を考慮に入れ、個々の劇場にこれらの要素が複合的に作用している局面を明らかにする。著名な俳優や演出家、また歴史的上演の記述のみで終わりがちな劇場史の地平を打ち破り、劇場史の体系的・構造的記述に踏み込むために、上記の問題域のそれぞれに関する詳細な文献学的調査に基づく新しい記述を試みる。劇場史の体系的・構造的記述は、ベルリンと東京の比較考察を可能にする。

４．研究成果

(1) ベルリンの Landesarchiv の資料群から、1945 年から 1952 年までの劇場政策の再構成に着手した。戦後、娯楽や文化を求める声は日増しに大きくなり、この要望に応えるためにベルリン市参事会（Magistrat der Stadt Berlin）は、1933 年 NS の権力掌握によって廃止された商業法 32 条及び 33 条 a 項による劇場・ヴァリエテ認可（1869 年制定）を復活させている。その許認可資料によると、1946 年 1 月 5 日の時点で、「劇場」「映画館」「カバレット・ヴァリエテ」の各施設の数は以下の通りになる。ロシア占領地区に多くの施設が展開し、アメリカとイギリスの占領地区を合わせると総数でロシア占領地区をやや上回るという状況であった。

Zone	Bühne	Kino	Varieté	
russische	10	73	32	115
französische	4	24	9	37
englische	8	40	21	69
amerikanische	8	51	14	73

認可された各施設の所在は資料に記録されており、それに基づいて特に「劇場」「カバレット・ヴァリエテ」について分布地図を作成し、劇場・ヴァリエテの展開風景に、冷戦の構造がはっきり認められる点を明らかにした。

(2) 1945 年 9 月 24 日のベルリン市参事会において、劇場の再建が議論され、次の７つの劇場を「市立劇場」(Stadttheater)と位置づけ、各劇場の財政・経理を市財政局のもとで行うことを決定している－1.Staatsoper、2.Deutsches Theater、3.Kammerspiele、4.Hebbel-Theater、5.Deutsches Opernhaus、6.Metropol-Theater 、7.Theater am Schiffbauerdamm。Staatsoper は爆撃の被害で Admiralspalast を間借り、また Deutsches Opernhaus、Metropol-Theater についても同様の状況にあるなかで、このような再建への取り組みが議論され決定されていたことは重要である（翌年には Schloßparktheater も Stadttheater に加えられる）。しかし、冷戦状況が厳しさを増すなかで、ベルリン全体を対象にした参事会は 1949 年 11 月 30 日に解散、ベルリンの行政は分断されることになる。1951/52 年のシーズンに西側のシャルロッテンブルクに Schillertheater が再建され、同じく西側の Hebbel-Theater は民営劇場となり Stadttheater のステータスを失った。Schloßparktheater は Schillertheater に吸収され、同劇場の工房・小劇場になる。上記

の他の劇場は東側に展開、1950 年には Deutsches Theater 、Theater am Schiffbauerdamm と並ぶ第三の Sprechtheater として Maxim-Gorki-Theater が開設、ソビエトの演劇の上演が集中的に行われた。1957 年東ベルリンでベルリン演劇祭が開催されたが、それは東西の劇場文化の分断を決定づけた。

(3) 東京はアメリカの占領下に入り、ベルリンのような分断を体験することはなかった。戦前の富国強兵という軍事優先の在り方にたいする強い反省から文化を重視する方向へと舵を切って行くことになる。1954 年に文化財保護法が改正されて「重要無形文化財国家指定制度」が発足、この文脈のなかで国立劇場の建設が議論されていくことになる。つまり、重要無形文化財という古典的な名人を国家で指定する制度を作った以上、「その人らの芸能をやってみせる場所や機関」「そういう大切な芸能の伝統を継承していくような養成機関」が存在しないと「仏作って魂入れず」になってしまうという、そのような議論の延長線上に国立劇場構想が展開した。この考え方を推し進めて、「舞楽、能、狂言、邦楽、日本舞踊、歌舞伎の公開とその技芸者の育成を中心にした国立劇場案」が矛盾なく提案されることになる。文部省の外局である文化財保護委員会に芸術施設調査研究協議会が設置され、この協議会の 1956 年の答申に基づいて、国立劇場の計画が議論されるようになる。設計案はコンペが行われ、奈良の正倉院を思わせる校倉造風の外観とした岩本博行案が採択されのが 1963 年、建物は 1966（昭和 41）年 10 月に竣工している。新劇やオペラ界などからの反発もあり、1956 年の答申のなかにオペラ劇場などの必要性が強調され、それは 1997 の国立第二劇場の建設を促すことになる。いずれにしても、明治時代初めから繰り返し議論され提案されてきた国立劇場は、戦後の大きな政策転換のなかで初めて実現された。

(4) 1948 年亡命から東ドイツに戻ったブレヒトはまず Deutsches Theater で演出の活動を始め、翌年には .Theater am Schiffbauerdamm に独自のアンサンブルを形成し、Berliner Ensemble としての活動を本格化する。ブレヒトが亡くなる 1956 年までの活動の持つ問題点をベルリン分裂の文化状況との関わりで分析した。戦後、東京においてブレヒトは積極的に受容されるが、その過程を雑誌『テアトロン』などの当時の資料から明らかにしながら、当時の最も優れたブレヒト方法論の日本の題材への適用事例として、福田善之の『真田風雲録』の構造を分析した。ブレヒトを媒介として、1950 年代から 60 年前後のベルリンと東京の演劇状況の共鳴の様相を明らかにした。

(5) ヴァリエテなどの娯楽にたいする戦後の大きな需要はベルリンと東京に共通して見られる現象である。戦後直後の裸体文化に対する人気の上昇と、テレビ・映画などのメディアとの競争による急速な衰退は、メディア論的な観点からも興味深い現象であり、資料の収集と分析に努めた。また、戦後の東京におけるヴァリエテの展開を主導した秦豊吉は 1920 年代のベルリンのヴァリエテ文化を体験し、それを 30 年代に東京の中枢で実現すべく日劇ミュージックホールなどの施設を作っていく。秦は戦後もヴァリエテに関わり、東京の娯楽文化に大きな貢献を果たすが、それらを当時の資料から再構成した。

(6) 戦後の大衆娯楽として映画は欠かすことのできないテーマである。ベルリンの Landesarchiv において、1945 年から 1952 年までの映画館認可に関する資料を収集し、東京との比較を考慮しながら、分析を進めている。

以上の 6 つの点を、それぞれ章をするような著作の刊行を目指して、ドイツ語と日本語によるテキストの作成を進めている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① Soichiro Itoda: Tokyo und sein historisches Vergnügungsviertel Asakusa im Umbruch - vom Unterhatungs-Mekka zur Touristenhochburg, Abteilung für Japanologie und Institut für Ostasienwissenschaft, Universität Wien, Beiträge zur Japanologie Bd. 43, 査読有, 2013, 41-55

② Soichiro Itoda: Auf Brechts Spuren im Japan der Nachkriegsära, Journal of Humanities Bd.18 (Institute of Humanities Dongduk Women's University, Seoul Korea), 査読有, 2011, 223-233

③ Soichiro Itoda: Anatomie west-östlicher Diskurssemantik. Yoko Tawadas Pulverschrift Berlin – Ein Kulturwelten-Szenario zwischen Tradition und Modere, Stauffenburg VerlagStauffenburg Discussion Bd.28 (Hrsg. von Christine Ivanovic: Poetik der Transformation. Beiträge zum Gesamtwerk mit Dem Stück Sancho Pansa von Yoko Tawada), 査読有, 2010, 125-148

④ 井戸田総一郎、バブル経済と東京の盛り場の変遷―なんとなく、クリスタル」現象と観光に特化する浅草、明治大学・ウィーン大学第 7 回シンポジウム論文集「東京とウィーン―1975 年から 2000 年まで 余暇と日常」、査読有、2010、13-22

⑤ Soichiro Itoda: Asakusa, Shinjuku, Shibuya – Auf- und Niedergang der

Tokyoter Vergnügungsviertel während des anhaltenden Wirtschaftsbooms, Abteilung für Japanologie und Institut für Ostasienwissenschaft, Universität Wien, Beiträge zur Japanologie Bd. 40, **査読有**, 2009, 31-53

〔学会発表〕（計 4 件）

① Soichiro Itoda: Beobachter von Randgruppen im Tokyoter Urbanisierungsprozess – Harunosuke Ishizumi, Naoko Nanjo und Kyohei Sakaguchi“, 12. Symposium der Meiji-Universität Tokyo und der Universität Wien, 2013 年 11 月 1 日

② **井戸田総一郎、1881 年ウィーン・リング劇場の大火災、明治大学・ウィーン大学第 11 回シンポジウム、2012 年 9 月 30 日**

③ **井戸田総一郎、国立劇場の構想とコンセプト、明治大学・ウィーン大学第 9 回共同シンポジウム、**2010 年 9 月 17 日

④ Soichiro Itoda: Tokyos historische Kernzone Asakusa im Umbruch, 8. Symposium in der Symposienreihe "Alltag und Freizeit in Tokyo und Wien", 2009 年 9 月 10 日

〔図書〕（計 3 件）

① Iris Hermann, Soichiro Itoda, Ralf Schnell, Hi-Young Song (Hg.): Metropolentheater: Berlin – Seoul – Tokio. Studien zur urbanen Kulturentwicklung nach 1945, 2014 **（現在編集中、総ページ数未定、担当論文ページ数未定）**

② Soichiro Itoda, Ralf Schnell, Hi-Young Song (Hg.): Von Goethe bis Grünbein: Deutsche Dichter im transkulturellen Dialog. Universitaetsverlag Siegen, 2011, 270 („Yoshiyuki Fukuda als Bewahrer des Brechtschen Bühnenvermächtnisses. Samurai und Sozialisten zwischen kulturellen Schwellenübertretung und V-Effekt“ S.134-157 **を担当)**

③ Soichiro Itoda, Yoshio Tomishige (Hg.): Aufführungsdiskurse im 18. Jahrhundert - Bühnenästethik, Theaterkritik und Öffentlichkeit, iudicium Verlag, 2011, 215 („Goethes Melodram Proserpina - Aufbruch zu neuen Spähren der Aufführungsästhetik“ S. 75-115 **を担当)**

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
井戸田総一郎（ITODA, Soichiro　　）
明治大学文学部教授
研究者番号：

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：